

陽焯天使レイリプ

2

R18
ADULT ONLY
成人向け

オークに処女喪失レイプされ、
逆パニースーツで『鬼ごっこ輪姦』される
ロリ爆乳ヒロイン

小説・妹尾尻尾
イラスト・舷



目次

目次・登場人物紹介	P 2～3
表紙イラスト	P 4
本編	P 5～P 1 2 8
あとがき	P 1 2 9
奥付	P 1 3 0

登場人物紹介

○羽咲 あかり／陽煌天使レイリーブ

15歳。本作のメインヒロイン。ロリ爆乳美少女。
身長142センチ、体重58キロ（うち10キロは胸の重み）。
バスト120センチ（Mカップ）、ウエスト55センチ、ヒップ88センチ。
無垢で、無邪気で、子供っぽい。気弱だが、誰にでも優しい女の子。
陽煌天使レイリーブに変身する。

○木村 比呂

15歳。あかりの幼馴染で、彼氏。あかりのことをいつも守っていた。
戦闘中は能力で『その場に存在しない』状態になる。レイリーブに助言をするためのものだが、結果的に、恋人が輪姦される様子を目の前で見ることになる。

○オーク

豚のバケモノ。幹部「オークグロマ」直属の配下。オークグロマが人間のメスや天使を犯して産ませた眷属・息子たち。
戦闘員たちよりも膂力に優れて耐久性もあり、見た目には似合わず知能も高い。

○戦闘員

幹部直属でない、低位の雑魚モブ。レイブできる対象はただの人間の女で、それも滅多に出くわさない。ましてや天使は幹部や上位魔族のものであり、戦闘員では指も触れられないことが多い。しかし今回は幹部オークグロマの計らいで「ウサギ狩り」に参加できるため、非常にサカっている。

○獣鬼帝オークグロマ

魔族／バージュ・マーダの幹部。
オーク・大鬼・ゴブリンを束ねるオークの王。

キャラクター／身長差比較



羽咲 あかり

変身後／レイリーブ

一般市民（比較対象）

キャラクター／身長差比較 2

オーク：200cm

戦闘員：190cm



レイリーブ：142cm





イラスト：舷

陽煌天使レイリーブ2

オークに処女喪失レイブされ、逆パニースーツで『鬼ごっこ輪姦』されるロリ爆乳ヒロイン

1 レイリーブ、活躍中！

夜の公園。

女の悲鳴が響く。

「きゃあああつ！ 助けて、誰かつ！」

声の主は会社帰りのOLで、彼女は複数の人間に囲まれていた。

いや、人間ではない。

「アイヒツヒツヒ！ 久しぶりの女だ！」

「アイヒツヒツヒ！ 捕まえて楽しむぞ！」

「アイヒツヒツヒ！ 我慢できねえ！ 金玉が爆発しそうだぜ！」

黒づくめのタイツを纏ったような怪人——魔族／バージュ・マードの戦闘員たちである。

「いやあつ、やめてえつ！」

戦闘員たちは女性の髪を掴み、その場に押し倒すと、人間離れた腕力で無造作に服を引きちぎった。女性の胸部が露わになる。Dカップの美乳が、夜の外気に晒された。両足を広げられ、きれいに毛の処理がされていたアソコも丸見えになる。

「ひいっ！」

戦闘員の一匹が女性のまたぐらに位置取った。奴らは黒タイツを着ているのではなく、戦士としてのボディペイントに近いものを塗っているだけに過ぎない。いわば裸同然だ。すでに股間は勃起しており、今にも女性のマンコに挿入しようとしている。

「アイヒツヒツヒ！ 久しぶりの人間の女ア！」

涎を垂らしながら、戦闘員が腰を動かす——その直前、

——きゅいいい……！！

戦闘員が光の柱に包まれた。

「アイッ!？」

次の瞬間、光に包まれた戦闘員が、消え去った——蒸発した。

「そこまでですっ！ 魔族／バージュ・マード！」

可憐な声が響き、残された戦闘員たちは狼狽えながら周囲を見渡した。

「アイイイ!？」

「どこだっ!？」

「何者だぁ!! ——アイ?」

その問いに答えが届く前に、さらに別の光が降り注ぎ、残る戦闘員たちを次々と消し飛ばしていく。

「こ、これは——!!」

「神術陽煌っ!？ 天使——アイイ!？」

ばしゅん、とまたしても消える戦闘員。

「し、しまった……!! 見つかったカ……!!」

ただ一人残された最後の戦闘員の元へ、かっかつ、という足音が聞こえる。

薄暗い闇の中から、電灯の光の下へ、天使が姿を現した。

女だった。

背丈は低い。小学生か中学生のようにも見える。しかし胸部があり得ないほど大きく、ピンクのレオタードのような衣装の谷間から、おっぱいがこぼれそうだった。

ロリ爆乳の美少女天使が、名乗りを上げる。

「――陽煌天使レイリープ、あなたを許しません！」

「あ、あ、あ……アイイイ！」

天使と一対一になった戦闘員に、勝ち目はない。黒づくめは奇声を発しながら、脱兎のごとく逃げ出してた。

背を向けて走る戦闘員へ、レイリープは冷静に右手を掲げる。

「逃がしません！――闇を被え、レイ・サンシャイン！」

ばしゅうっ！

断末魔の叫びを上げる暇もなく、戦闘員は天上から降り注いだ光に吞まれ、蒸発した。

レイリープの勝利である。

「ふう……」

息を吐くレイリープ。

襲われていた女性を振り返って、片膝をつき、倒れている彼女と目線を合わせる。

「えっと、大丈夫、ですか……？」

理解が追いついていないのか、女性は呆然としながら、

「え、ええ……。ありがとうございます……」

レイリープは、凛々しかった先ほどとは別人のようにおどおどしながら、助言する。

「そ、その、この辺りはまだ、夜は危険です。魔族は少なくなりましたが、たまにああいう斥候？　みたいなものもいる、みたいです、から……」

まるでコミュ障のように、ただただしく続ける。

「あまり、出歩かない方が、良いかなって、思います」

「え、ええ、そうね。ありがとうございます……？」

「じゃ、じゃあ、私はこれで」

すつく、と立ち上がった。大きな胸と大きなお尻が揺れる。ミニスカートからはショー
ツが丸見えだった。

そんなレイリーブに、女性は尋ねる。

「あの、あなたが、ひょっとして、天使……?」
振り返り、

「はい！ 陽煌天使レイリーブです！ 人間の皆さんを、魔族から守ります！」

そう言って、レイリーブは跳躍した。電灯を足場にしてさらにジャンプし、夜の闇へ消えていく。

「あ……」

女性が手を伸ばしかけたが、あっという間に見えなくなってしまう。戦闘員もそうだが、天使もやはり人間離れした筋力の持ち主なのだった。

取り残された女性が、座ったまましばし呆然としていると、パトカーのサイレンが近づいてきた。

どたどたと、警察官が走ってくる。

「——あ、いた！ 大丈夫ですかー!？」

「こっちだ！ 毛布、毛布持ってこい！」

「通報がありました！ 怪我はありませんか？」

婦警に毛布をかけられ、頷く女性。そこでようやく緊張の糸が切れたのか、涙を流し始める。

「はい……。天使さまが、助けてくれました……!」

女性は婦警に肩を抱かれながら、さめざめと泣き続けた。

それを、遠くから見守る人影があった。

「あのひと、大丈夫、かな……?」

レイリーブである。ビルの屋上から、強化された視力で彼女を見ていた。

——あなたは、間に合いました。きっと大丈夫でしょう。

——ああ、よくやったぞ、あかり！

脳内に、二人の男女の声が響く。

それを聞いたレイリープは、嬉しそうに頷いた。

「そ、そうだよね！ うん！ よかったあ！」

無邪気な微笑みを浮かべ、心から喜ぶレイリープ。

陽煌天使は、今夜もまた、魔族の襲撃から人間を救ったのだった。

2 比呂とあかりの恋人デート

都内某所・繁華街。

日曜の午後。

陽煌天使レイリプが海魔帝イカトパスを倒してから、二週間が経過した。

あの戦い以来、魔王軍の侵攻速度は劇的に低下した。指揮官を失った彼らは、散発的に街や人を襲うも、すべてレイリプが撃退したからだ。

魔族は首都を重点的に攻めていた。奴らが出現すれば、ガイド役の天使・恵が、レイリプをテレポートさせる。魔王軍の幹部を倒したほどの実力を持ったレイリプに、雑魚戦闘員たちはなす術もなく倒されていった。

日本は、そして東京は、つかの間の平和を取り戻していた。

☆

「それもこれも、あかりの頑張りのおかげだな」

イカトパスと戦った繁華街を歩きながら、比呂は隣にいるあかりへ笑った。

「そ、そんなことないよう。ヒロ君と恵ちゃんが助けてくれるから……」

あかりは困ったように首を振る。

「私が変身できるのも、恵ちゃんが力をくれて、ヒロ君が神術の半分をやってくれるから……」

「でも、実際に戦ってるのはあかりだけ。凄いよ。自信持てって」

あかりの両肩に手を置いて、比呂は頷く。自分の胸辺りまでしか身長がない小さな彼女。こんな女の子が、あの怪人どもと戦っているのだ。

「う、うん。ありがとう、ヒロ君」

まだ困ったように、あかりは比呂を見上げて微笑んだ。どうもこいつは自己評価が低い、と比呂は思う。

もっと言葉をかけるべきか、と悩んでいると、何人かの通行人が自分たちを見ていることに気付いた。

いや、自分たちではなく、あかりをだ。

小さい背丈に、頭より大きな胸、そして容姿はアイドル顔負けの美少女とくれば、目立たないわけがない。今日着ているブラウスも、胸部が窮屈そうに張りだしていた。それが余計に目を引いてしまうのだろう。あかりにはよくあることだった。

「行こうか」

「う、うん」

比呂はあかりの手を引いて歩き出す。

今日は、デートのやり直しにきていた。なにせ前は、デートの途中で『死んでしまった』からである。

前回——イカトパスと戦った二週間前ではなく、その更に二週間前。つまり今から一か月前の、『魔王軍が人間界へ攻め込んだ日』だ。

あの日、比呂とあかりは、魔王軍と天使・レイソフィーとの戦いに巻き込まれて死亡した。

魔王軍の侵攻に対し、天使たちも人間界へ大勢やってきては、魔族と戦った。

そのうちの一人、レイソフィーは、魔王軍幹部イカトパスの副官を滅ぼすものの、自身も深い傷を負う。そのとき、倒れていたあかりに『神術の潜在能力』を見出し、消えかけていた彼女の魂に問いかけた。

——魔族と戦う覚悟はありますか？

神術によるテレパシーでそう尋ねられたあかりは、

——それで、ヒロ君が助かるなら。

契約は結ばれた。

こうしてレイソフィーは、その力のほとんどをあかりと比呂に与え、そして二人は蘇った。

あかりは、レイソフィーですら扱いきれなかった『タイムリープ能力』という神術を、比呂と力を合わせることで使えるようになった。

レイソフィーはこう考える。自分一人では魔王軍には勝てない。だが、この二人がいればあるいは、と。

あかりは『陽煌天使レイリース』として、魔族と戦う運命となり、比呂もまた、彼女をサポートすることとなった。

レイソフィーは『天使 恵』と名乗り、人間として、比呂の家に住んでいる。彼の両親に、『自分は親戚の子である』という暗示をかけて。

今も姿を消し、比呂とあかりの近くにいるはずだ。

——ヒロ、アカリ、自宅外でのそのような会話は危険です。慎んでください。

と、二人の脳内に直接声が届く。恵だ。

——ああ、そうだな。気を付けるよ。

——ごめんなさい、恵ちゃん。

比呂とあかりは、そう心の中で返事をした。すると、

——結構です。では、休暇を楽しんでください。

と、事務的な言葉が返ってきた。嫌味でも何でもなく、これが恵の『素』である。

——休暇って。

苦笑する比呂。天使である恵にとって魔王軍と戦うことは『仕事』であり、それは新たに天使となったあかりも同様であると考えているのだろうか。

イカトパスを倒してからの二週間、あかりは二日に一度は出現する雑魚戦闘員の討伐に出動していた。魔王軍の侵攻により、学校はしばらく休校となったため、時間はある。睡

眠は取れるため肉体的な疲労はそれほどでもないが、精神は張りつめているはずだと、恵は二人に休暇を勧めたのだった。

とはいえ、あかりは心身ともに健康そのものだ。学校がお休みで比呂とずっと一緒にいられるし、魔族との戦闘もあつという間に片が付いてしまうからだ。尤もそれは、彼女にとって『敗北の記憶』は存在しないから、でもある。

敗北の記憶。

実はすでに、あかりは十数回ほど敗北しており、そのたびに悲惨な凌辱を受けている。

だが、それを覚えてるのは比呂だけだ。タイムリープの際に、あかりの敗北した事実はずべて無かったことになり、あかりは覚えていない。

恵は比呂から記憶を共有されるが、やはり実感はない。

愛する恋人が、異形の化物や守った人間たちに処女喪失レイプされるなどという実体験は、比呂だけが味わわれていた。

とはいえ、その比呂も、『ある一点』を除いては精神的に安定している。あかりと同じく、恵から『天使の力』を受け継いだため、精神の回復——いわゆる『立ち直り』が異常に速いのだった。

「今日はたい焼きを食べに行くぞー！ その後は、あかりの好きな水族館だ」

「わあい！ たい焼きー！ おさかなー！」

あかりが嬉しそうに声を上げた。可愛い。

以前に比べて、少しだけ人通りの減った繁華街を、あかりが轢かれないように車道側を歩きつつ、比呂は彼女と手を繋いで歩いていく。

身長差があるから、手を繋いで歩くのも少しだけコツがいる。背が高い方が、肘を伸ばし過ぎないのが肝要だ。

「えへへ、たいやき、おさかな」

嬉しそうに歩くあかり。お胸も嬉しそうに跳ねている。周囲の視線が自然と集まってくる。

「……………(ちら)」

「……………(ちらちら)」

「……………(ちらちら)」

たつぶんたつぶん揺れる胸をチラ見してくる無粋な輩たちの視線をシャットアウトするために、あかりの前でさりげなさを装いつつスマホをぶんぶん振ってみる。ぜんぜんさりげなくないが仕方ない。

あかりの爆乳を三度見していた男がバツの悪そうな顔をしてすれ違い、ざまみろ、と思しながら、比呂は振り回してたスマホの画面を見た。

「これから行きたい焼き屋な？」

「うん！」

「たい焼き屋なんだけど、『鯛』じゃないんだって」

「へ？ たいじゃないの？」

「イワシとかスズキの形らしいぜ。んで中身もアンコだけじゃなくて、クリームとかバナラアイスとか選べるらしい」

あかりの顔が驚きに満ちた。瞳がきらきら輝いている。ちょうかわいい。

「すごーーい！ バニラ！ たい焼きにバナラアイス！ あ、たい焼きじゃないんだっ！」

「ま、たい焼き亜種ってところかな」

「亜種っ！ すごい、楽しみーっ！ ヒロ君、そういうところ見つけるのすごいねっ！」

「別に大したことないって。インスタに流れてきただけだし」

嘘です。本当は昨日、ネットで死ぬほど探し回りました。あかりが喜びそうな場所を。

ま、カッコ悪いから言わないけどーと、比呂がすました顔をしていたら、

——アカリ。それは嘘です。ヒロは昨夜、ウェブで数時間かけてかなり真剣にデートスポットを検索し、吟味していました。

恵が二人にテレパシーでバラした。

おいてめえ。

「……………」

「……………」

「……………ヒロ君」

「ん」

「……………だいすき」

「お、おう」

めっちゃ恥ずかしいなこれ。

「あー、うん、なんだ、そろそろ腹減ったなー」

照れ隠しに言いながら、再び歩く。

あかりが微笑みながら、

「そうだね、私もー」

「もう少し歩くけど、大丈夫か？」

「うん、平気！」

「うわっ、おっばいでっかつ！」

と、喫茶店の前を通った時だ。テラス席にいた客が何やら話しているのが聞こえてしまった。

無然とした表情で振り向く比呂。だがその客らはあかりではなく、タブレット端末を見ている。

「あ」

映像がこちらからも見える。

映っているのは、『レイリープ』だった。

陽煌天使レイリーブが魔族を撃退している動画だ。街で誰かが撮ったものが、動画サイトでアップされているらしい。

「そっちな……」

「うう……」

比呂が安堵して呟くと、しかし隣のあかりは恥ずかしそうに呻いた。

「？」

不思議そうに比呂があかりを見る。俯いた彼女は、比呂からはつむじしか見えない。ただ、耳は真っ赤だった。

気付けば、他にも何人か、レイリーブの活躍する場面を流すニュースや動画を見ていた。

世間では、魔族と戦う天使は、好意的に受け止められている。特に日本におけるレイリーブの人気は高い。海の向こうの大国や連合王国が魔王軍によって次々と侵略されるなか、日本だけは幹部イカトパスの撃退に成功し、その侵攻が一時的に中断されているからでもある。

レイリーブは、人々に受け入れられていた。

その『服装』以外は、の話だが。

「……いつ見てもエロいなー」

「……天使って、恥ずかしくないのかな」

「まあ、水泳の選手とか、体操とかと一緒になんじゃね？」

「にしてもエロすぎるよなあ……。嬉しいけど」

喫茶店の彼らが、そんなことを口にする。

そう、天使はみな、肌の露出度が高かった。ほとんど半裸である。

さらにレイリーブの場合は、他の天使に比べて『身長が低い』わりに『胸が大きい』という事情もある。

全国ネットのニュース番組では、彼女の戦闘シーンが、部分的にカットされることもあるほどだ。

もちろんネットの動画サイトでは無修正でアップされているし、喫茶店で鼻の下を伸ばしてタブレット端末を食い入るように見つめている彼らが流しているのもそれだ。

際どいピンクの戦闘装束と、申し訳程度のミニスカートを身に着けた、身長142センチ・Mカップのロリ爆乳天使が、雑魚戦闘員たちをばったばったとなぎ倒している動画である。

レイリーブの華麗な動きはもちろん、ぶるん♡ と揺れる120センチの爆乳や、むちっ♡ としたはち切れんばかりにお尻が映っている。むしろそっちに焦点を合わしている節もあった。

——おお……。

——レイリーブだ……。

今度は後ろからそんな声がする。振り返ると、みな一様に顔を上げていた。

同じように正面をしてみる。

なるほど。

商業ビルの巨大な街頭モニターにも、同じような映像が映し出されていた。

「うわ……。これはまた、大きいな……」

思わず比呂が両方の意味（乳とモニター）で呟くと、

「うう、ヒロ君、見ちゃだめえ……」

隣で恥ずかしそうに俯いていたあかりが、ぴーんと背伸びして手を上げて、比呂の目を隠そうとしてくる。でも全然届いてない。なにこの生き物、ちょー可愛い。

比呂は小声で、

「いや、いつも見てるじゃん……」

「それでも恥ずかしいのお」

涙目だった。

まあ、わからんでもない、と比呂は思う。こうしてモニターを通して見る『レイリープ』は、本当に可憐で、美しくて、そしてめちゃくちゃエロい。

谷間からあの爆乳がこぼれるんじゃないかと、見ているこっちが冷や冷やする。

いや、と思う。

頭の片隅から、『記憶』という冷えた刃が滑り込んで、比呂の心を切りつける。

胸が見えてしまうのではないか、じゃない。

実際に、そういうことが、あったんだよな。

そして、ここにいるような、何でもない連中に、あかりに守られた人間たちに、あかりは胸を曝け出され、下着を剥ぎ取られて、そして――。

そして。

「……ヒロ君？」

心配そうに、あかりが比呂を見ていた。

怒りが顔に出ていたのだろうか。

「大丈夫？」

「……ああ、ごめん。大丈夫」

「ほんとに……？」

「本当だよ。ごめん、行こうか」

モニターを見上げている連中を意識的に視界から外し、比呂はあかりの手を引いて歩き出す。

どうしようもなくむかむかする。そんな時だった。

――この国の民は幸運です。アカリという強力な天使が生まれ、守護しているのですから。

恵がテレパシーでそんなことを言う。比呂は頷いて、

——やっぱり、あかりって天使の中でも強いんだな。

——ええ、あの特殊神術を除いても、潜在能力ではおよそ最強の一人でしょう。経験さえ積みば、あの『白兔天使』にすら匹敵すると思われれます。

白兔天使？ と比呂とあかりが首を傾げる。

——失礼、情報共有をしていませんでしたね。この島国から南にある大陸に派遣された天使です。名を、『白兔天使ケイニーシャ』。

——強いのか？

——こと武力においては最強です。ただ、南の大陸の守護を任されたのですが、しばらく前から連絡が取れません。あるいは、もう……。

——そっか……。

以前、あかりが敗北した際に、恵から聞いたことがある。自分たちの姉妹もこうして死んでいったと。

南の大陸にある国は、もうほとんど政府が機能していないらしい。魔族に落とされたところを見るのが妥当だろう。つまり、その守護に当たっていた『最強の天使』もすでに……。

そして、それは他人事ではないのだ。あかりも、レイリーブとなって魔族と戦う、天使なのだから。その『ケイニーシャ』のように、敗北するときに訪れるかもしれない。

タイムリープですら防げない、決定的な敗北が。

——ですが、アカリは大丈夫でしょう。

比呂とあかりの緊張が伝わったのか、恵は珍しくそんな希望的観測を口にした。

——あの幹部、イカトパスを見事打倒したのですから。しかも初陣で。ここまでの才能は、見たことはありません。アカリなら大丈夫です。

恵は一見ロボットのようだが、ちゃんと感情がある。今も、比呂の憤りを鎮めつつ、あかりを勇気付けようとしたに違いない。

比呂は、その意を汲むことにした。

——そうだな！　なんとって俺たちがついてるもんな！　頑張ろうぜ、あかり、恵！

——う、うん！　頑張ります！

——ええ、最善を尽くしましょう。

よし、とあかりと頷き合う比呂。

と、そのあかりが、何かに気付いて、

「あ、きれい」

そう呟いた。

あかりの視線を追うと、雑貨屋が目に入った。ああ、と比呂が頷く。

「似合いそうだな」

雑貨屋に歩いていき、ウィンドウに飾ってある商品と値札を見て、あかりに尋ねた。

「入っていいか？」

「あ、うん！」

比呂はほとんど迷うことなく、飾られていた水晶のネックレスを買って、そのままあかりにプレゼントした。

それは、あかりが目を奪われたものだった。

あかりが、おずおずと顔を上げる。

「いいの……？」

「いつも頑張ってるからな」

よしよし、とあかりの頭を撫でる。さらさらの髪の毛が気持ちいい。最高の撫で心地だ。

二千円程度の、玩具のようなものだ。それでもあかりは心の底から嬉しそうに笑った。

「ヒロ君、だーーーーー好きっ!!」

道端だっというのにあかりが抱き着いてきた。

それから、比呂の胸にごしごしと額をくっ付けてくる。

うわあやめろお前恥ずかしい嬉しい俺も大好きだ。

「ちよっ、あかり、目立ってるっ、目立ってるからっ！」

「あっ、ごめんなさいっ……！」

慌てて離れるあかり。ちよっと惜しい気がする比呂。

気まずい。

「あらあら」

「ふふ、可愛らしいわねえ」

と、雑貨屋から出てきたお婆ちゃん二人に微笑まれてしまう。

「う~~~~」

二人して顔を真っ赤にする。恥ずかしい。でも、二人の手は握られたままだ。

「い、行こうか」

「う、うん……」

死ぬほど恥ずかしいけど、死ぬほど幸せだった。

傍から見れば初々しい中学生カップルにしか見えない二人。

その背後の巨大モニターに映っているのは、凛々しい『レイリープ』の姿。

まさかこの二人が、天使の力で人々を守っているなど、誰も思わなかった。

——まだ、この時点では。

3 軍師の思惑・天使たちの凌辱・強気な天使が父からレイプ（幻覚）

魔界。

魔王軍・本拠地。

第十三格納庫——通称『遊技場』。

「——ふむ。これが陽煌天使レイリーブですか」

その入り口で、男が、中空に表示された映像を見て、そう呟いた。

スーツのようにも見える、漆黒の鎧に身を包んでいる。顔は頭部全体をすっぽりと覆う仮面で隠れ、その表情は窺い知れない。

「なるほど。凄まじいエナジーですね」

映像は、比呂とあかりが繁華街で見っていたような、人間界で流されているものではなく、彼の配下が記録したそれである。いくつもの角度から写されており、観賞用というよりはデータを収集するための記録だ。

『——闇を斬れ、レイ・ブレード！』

映像の中で、レイリーブが海魔帝イカトパスを光の剣でぶった斬った。戦闘開始からわずか30秒である。この映像からは、『イカトパスはあっさりと瞬殺された』という印象を多くの者が受けるだろう。

「……………」

それを、漆黒の男は凝視している。表情は仮面に隠され、何を考えているのか見た目ではまるでわからない。

ましてやそれが——魔王軍の現・最高指揮官の思考であればなおさらだ。

魔王軍には、長である魔王の配下に、『三帝一師』と呼ばれる幹部たちがいる。

海魔帝イカトパス。

獣鬼帝オークグロマ。

蟲蝕帝アナスフィラ。

そしてこの仮面の男だ。

魔族の目的は『魔王を復活させる』こと。その目的のために、他の三体の幹部たちは、便宜上、この男の助言——という体の指示——に従っている。本来、幹部たちの間に序列はないが、そうした方が合理的であり、無駄がないためだ。

魔王は人間界に封印されている。

魔族／バージュ・マードは、人間界への侵攻を開始した。が、それは天界へ攻め込む足掛かりに過ぎない。

魔族たちは、いま天界に乗り込んでも勝てない。天界に入った瞬間に、太陽に近づいた氷のように滅せられる。

封印された魔王を復活させ、自分たちの力を引き上げなければならない。そう。魔王が復活すれば、魔族の力は数百倍に跳ね上がり、天界でも滅せられることなく活動できるのである。

人間界は、魔界と天界の間にある。天界の神たちが魔族との『緩衝材』として作ったのだ。

魔王が天界で封じられなかったのは、魔王を封じると天界が穢れることを神々が嫌ったのだと、彼らは考えている。くだらん潔癖主義だとも。

現に人間界では、封じられている魔王が放つ淫気Ⅱ瘴気が漂っている。人間が魔に抗えなくなるのはそのせいでもある。だが、その浅はかな潔癖主義のために、魔王は魔族たちが手の届く人間界に封じられ、復活まであと一步のところにある。

人間界を淫気Ⅱ瘴気で満たし、魔力を集め、魔王を復活させ、天界に乗り込み、支配する。

それが、かつて天界から追い出された魔族／バージュ・マードの、数万年にわたる悲願であった。

本来、魔族およびその軍隊は『魔王』が全指揮を執る。だが、現在はその魔王が封印されているため、魔王の右腕と呼ばれるこの仮面の幹部が、魔王軍の指揮を暫定的に執っていた。

その名、『穢軍師カルチノイズ』。

魔族幹部・三帝一師の一角であり、現在の魔王軍・最高指揮官である。

侵攻開始以来、破竹の勢いで人間界を制圧していった魔王軍だが、ある群島の国家においては作戦進行が停滞している。

東京——日本である。

イカトパス帝に任せたエリアだが、その将がまさかの不覚を取った。かつて、何体もの天使を屠り、一部の神族ですら滅ぼしたことがある、あの海魔帝イカトパスがだ。

「……………ふむ」

カルチノイズは、イカトパスを圧倒した天使の映像を何度も繰り返し見ている。

彼は、この天使を脅威に感じていた。

「まるでイカトパス帝の能力を予め知っていたような動作と戦術ですね…………」

内通者でもいるのか、と疑念を抱く。

「あるいは——天使の特殊能力、ですか。『神術陽煌しんじつようかう、その底はまだ知れませんかね…

…。人間界に現れた『最後の天使』…………。その力は未知数、というわけですか…………」

タブレットでレイリープの戦闘シーンを見ていたカルチノイズは、顔を上げ、振り返る。

「あなた方の妹さんが頑張っているようですが——なにか心当たりはありませんか？」

そこには、何百体もの魔物に犯されている、数十人の天使たちの姿があった。

まるで工場か、あるいは牛舎のようだった。薄暗く、壁で囲まれた広大な建物の中で、特殊な鎖で拘束された美しい天使たちが、魔界の化け物どもにレイプされていた。

魔王軍において最も構成人数の多い黒づくめの戦闘員に代わる代わる犯されている金髪碧眼の天使。

ゴブリン・オークといった魔獣系モンスターにオナホ人形のように犯されている褐色の天使。

イカやイソギンチャクに似た形をした海魔系の触手に絶え間なくイキ狂わされている幼女天使。

イモムシ・ムカデ・ハチなどに代表される蟲系の魔物にひたすら卵を植え付けられている巨乳天使――。

発狂寸前の天使の嬌声や、嫌がり続ける天使の悲鳴が延々と響く、魔族どものおぞましき『遊戯場』である。

「ああっ！ いやあっ！ やめっやめてえっ！！ お願いっ、もう腔内なかに出さないでえっ！！」

「汚らわしいっ……！！ 汚らわしいっ……！！ ひとの胸をつ吸引器のようにっ……！！ 出来損ないのっ化物っどもめっ……！！ こんなっ、屈辱っ……！！」

「くそっ、触るなあ、触るなあっ！ やめっ、入れるなっ、やめろ！ いやっ――やめてっ、やめてええ！ いやあああっ！」

「ああっ……ううっ……」

「あんっ♡ やだっ♡ らめえ♡ イってるからあ♡ いまイってるからあ♡ おちんちん入れないでえっ♡ ずぼずぼしちらめえ♡ あひいんっ♡♡」

「うう……！！ 殺してやりますうっ！ 絶対にいっ！ ころっ……殺してやりますからあっ！ いやあああっ！」

「……………びくっ……びくっ……」

「んああっ！♡　そこお、気持ちいい、気持ちいいのお！♡　魔物のおちんぼ、もつとくださあい！　精液びゅーびゅー出してえっ♡　マゾ天使のよわよわマンコにたくさん射精してえっ♡」

「はいいい……！　オーク様の言うこと、なんでも聞きますう……！　何でも話しますからあ……！　だからもう、痛いのをやめてくださいい……！！」

「びくっ………びくっ………」

「ああっ！♡　産まれるっ！♡　産まれちゃうっ！♡　魔物の赤ちゃんっ、天使のあたしが産んじゃうよおっ！♡」

ふむ、とカルチノイズは首を傾げる。こちらの声が全く聞こえていないようだ。もっとも、元より返事など期待していなかったが。

ここにいる天使たちは、カルチノイズ以外の幹部や、雑兵の戦闘員が捕まえてきたものだ。

拿捕した天使は、魔族幹部が愉しみ、弄び、その胎はらを使って自らの眷属を十二分に生み出した後、ここに捨てられ、下位兵士どもの玩具となる。

魔族幹部に敗北し、使い古された天使は、高潔な彼女らが『雑魚』と蔑んでいた低俗モンスターどもに輪姦され、死ぬまで魔物を産み続けるのであった。

だがそれも、度が過ぎると『壊れる』。元々、天使とは、神の使いである機能を有した女体型の『機械』のようなものだ。一定のストレスを与えると、ぶつつりと感情を途切れさせ、何の反応もしなくなる。そのうち肉体の機能も停止し、死ぬ。

軍師は、近くにいたオークの一団に目を向けた。

でっぷりと太った緑色の肌をした、豚頭の化け物だ。獣鬼帝オークグロマの眷属たちである。黒づくめの戦闘員たちよりも臂力に優れて耐久性もあり、知能もやや高い。

彼らの中心にいるのは、紫色の髪をした長身モデル体型の天使であるが、もうピクリとも動いていなかった。

オークの一匹がその天使の頭を持って、つまらなさそうに吐き捨てる。

「ちっ……もう反応しなくなりやがった」

「所詮は神の使いパシリか。けっ、俺たちを散々汚らわしいだの不出来だの喚きたてておきながら、てめえらの方こそ出来の悪い人形じゃねえか」

「やっぱり天使なんかより女神を犯す方が燃えるぜ。あいつら、半端に不死な奴らが多いから、いくらやっても死なねえし、反応もいいしな」

「違いねえ」

げらげらと笑いながらも、腰を振ることは忘れていない。死んだように動かない天使を、豚の化物は容赦なくレイプし、その精子を注ぎ込む。そうして、次のオークに交代する。

カルチノイズはその様子を淡々と眺めていた。

オークたちも今はこう言っているが、人間界へ侵攻を開始し、天使たちを次々と捕まえて犯し始めた当初は、それはもうとてつもない盛り上がりだった。それまでは、ときおり魔界へ偵察に来ていた数少ない斥候の天使を拿捕して犯していたが、それもほとんどが幹部たちの間のみで回されており、彼ら下位魔族たちには滅多に降りてこなかった。

また人間界の女を捕らえようにも天使たちにバレないように慎重にならざるをえず、あまり手に入らなかったのだ。

それが、人間界への侵攻が成功し、半ば手中に収めたことで、かの界を守護していた『天使』というおよそ最高の女体を持つオナホを大量に入手することができた。『女を犯す』ことに何よりも喜びを覚え、またそれ自体が瘴気を蔓延させる——つまり勢力を増加させる特徴を持つ魔王軍は、歓喜に包まれたのである。

だが、それも数週間が経った今となっては——。

至高の美しさを持った天使をつまらなそうに扱うオークを見て、カルチノイズは心中で呟く。

——さすがに飽きますか。が、それもまた良いでしょう。大勢の『女神』がいる天界へ侵攻するための、士気上昇に繋がりますから。

軍師はさらに視線を移動させる。清潔とは程遠い、巨大な監獄のようなこの遊技場には、何十人もの天使が輪姦されている。

一人の天使を中心に小規模なサークルがいくつも出来上がっている状態だ。もちろん、その規模は一定ではない。小さなサークルもあれば、大きな規模——つまり大勢に次々と代わる代わるレイプされている天使もいる。

端的に言えば、人気の差である。

この遊技場に捨てられる天使たちは、その半分ほどが『壊れた人形』のように動かない。前述した通り、すでに魔族幹部に飽きるほど遊びつくされた個体だからだ。ゆえに、いまだ意識を保ち、虚勢を張り上げ、殺意をむき出しにしつつも、魔物どもに犯される『鳴き声』を上げることができる『天使』は人気であり、多くの者が集中する。

例えば、いま最も人気が高いのは、ウサギのように頭の上にびんと立てた耳が特徴だった、『ケイニーシャ』という天使である。

162センチのやや長身に、（人間社会のカップ数に反映すれば）Hカップ95センチの巨乳が映える。腰は細く、薄く割れた腹筋に、弾力のある尻が生意気そうに主張する。

「ぶっ殺すっ……！ てめえっ、らあっ、ぜったいっ……！ うぶっ！ おげえっ！ あぐうっ？♡ んあっ♡」

この強気な天使は、穢軍師カルチノイズが、自ら捕らえた個体である。

これは非常に珍しい。

カルチノイズは軍師という立場上、基本的に戦場である人間界へは赴かない。封印されている魔王の代わりに全軍を代理で指揮する、という責務もその基本姿勢を強固にしている。他の武闘派の——イカトパスやオークグロマのような——幹部に知略と戦術を『助言』し、制圧地域を託すのが専らの仕事である。よって、彼自らが天使を拿捕することは皆無であった。

が、この「白兔天使ケイニーシャ」だけは違った。

彼女はイカトパスやオークグロマを撤退に追い込むほどの戦力を有していた。そう、単純に強かったのだ。

ゆえにカルチノイズは、自ら戦闘員を引き連れてケイニーシャ打倒に赴いた。そして、とある街の一般市民を自身の能力で丸ごと操り、彼女を罠に嵌めて、拿捕したのだった。

カルチノイズはケイニーシャを犯さなかった。

つまり、魔族幹部に一切手を付けられていない、いわば『純潔』の天使である。

だからだろう。普通、遊技場に落とされる頃には心身ともにボロボロになっているのが常であるのに、ケイニーシャは違った。

この天使は、気が強かった。

それが余計に、鬼畜どもの気を引いた。

カルチノイズの姦計によって捕獲されてからというもの、四肢を切断され、心の底から軽蔑していた汚らしい化物どもに連日輪姦されている。それは、実に数百体・数千発の射精に及び、彼女の神々しかった白い髪は、いまやオークやゴブリンの黄ばんだ精子を散々浴びてかつての美しさはそれこそ毛ほどもないし、数千キロ離れた物音すら聞き逃さないと自負していたウサギ耳は、哀れにも両方が噛み千切られていた。

今はもう根元までしかないこのウサギ耳だが、大勢のイモムシ型の魔物たちによってまるで葉っぱのようにゆっくり喰い進められていく悔しさと痛みは、大鬼の巨大なイチモツオーガに処女を奪われた時よりも、ゴブリンどもに一本ずつ指を切り落とされた時よりも、サメ型に両手両足を喰いちぎられた時よりも辛かったであろう。

だがそれでもまだ、このウサギ天使は正気を保ち、殺意と敵意をむき出して、気丈に振舞っている。オークのぶつといチンポをマンコに抽出され、ゴブリンの汚いイチモツを全身に擦られ、イソギンチャクの触手にクリトリスを舐められ、何匹もの蟲に尻を犯されながら。

「ふっ……ぐうっ……!! くそっ……!! オレに……触んなっ!! ……やめっ、やめろおっ! ぶっ殺す! お前らっ、全員っ! あんっ!♡ んああっ!♡ そこっ……弄るなあっ……!! ぶっころっ……はあああんっ! してやるっ……!! イっ……!!♡ ああっ、くそっ、お尻はっ……!! やめっ……!! んごおおっ! いくっ……!!♡ 腔内なかに出すなっ……!!♡ いくいくっ……!!♡ くそっ……!!♡ あっあっあっあっ!!♡ はああああんっ!♡」

催淫効果のある魔族特有の精子で身体中が敏感になり、自分の意思に反して絶頂を絶え間なく刻まれているものの、ケイニーシャの戦意は健在だった。彼女の底力——精神的な回復力が、その一因だろう。

「ふむ」

カルチノイズはこの白兔天使ケイニーシャの『囲み』へ歩いて行った。彼女から『レイリープ』の話を聞こうと考えたのである。

すでに他の天使からは拷問・洗脳などの手段で情報を引き出している。そのおかげで、こうも容易く人間界を侵攻できているのであるが、しかし『最後の天使』こと『陽煌天使レイリープ』なるものの情報は一切なかった。どうやら彼女レイリープは、あまり他の天使たちに知られていないようだ。特殊な存在だったのかも知れない。それこそ、魔族幹部を打倒するための、天使の切り札か。

——ケイニーシャの戦闘能力は、天使たちの中でも上位に存在する。持っている情報も多いと良いのですが。

天使の能力たる【神術陽煌】を生み出す『核』の在処は天使によって異なる。ケイニーシャの場合は、あの特徴的な『兎耳』であり、それを誇りとしていた。

自身のアイデンティティたる『兎耳』を、低俗な魔物どもに端から喰いちぎられていたにも拘わらず、ケイニーシャは『墮ち』てはいなかった。他の拷問も試したが一向に口を割らない。耳どころか手足もすでに切り落としているダルマ状態だが、吐き出すのは罵声と嬌声のみ。遊技場で下級モンスターどもの慰み者にさせていたが、今一つ効果は上がらないようだ。

——やはり、私自身の能力でゆっくりと穢おかしていくしかありませんか。

ふむ、と『穢軍師』の位を持つカルチノイズは頷いた。

軍師が近づくと、何も言わずとも囲みが解かれていく。カルチノイズの歩みを阻害しないよう、化物どもはお互いに示し合わせ、さっと道を開ける。ケイニーシャの輪姦が一時中断され、彼女は快楽に身体を震わせながら息を整えると、ぼろぼろの顔で、それでも気丈に周囲を睨んで見せた。

「うう……あうっ……♡ はあっ……はあっん……♡ な、んだ……？ もう終わり、か……？ はっ、情けねえ……。オレはまだ、どいつのガキも、孕んじゃいねえぞ……！！」
子宮を神術でガードしてっからな……！！ ざまあみやがれ……！！」

ぎりっと敵意を放つケイニーシャ。不屈の闘志に、取り囲んで犯しているにも拘わらず、一部のヘタレたゴブリンどもは怯む様子すら見せた。

すでに四肢は無く、能力もほとんどが封じられているが、このケイニーシャは天使としては最高の戦力を有していた。

なにしろ、海魔帝イカトパスや豚鬼帝グローマグロマと相対し、彼らを撤退にまで追い込ませた実力の持ち主である。いくら魔族幹部が人間界では本来の力を十分の一も力を出せないとはいえ、だ。

それも、たかが天使に。

天界にいる神が相手なら幹部が不覚を取るのもわかる。奴らは強敵であり、我らが魔王すら封印せしめた。

だが、神でもない、たかが天使に、魔王軍幹部最強の双璧が正面から打倒されるのは計算外だ。その事実、カルチノイズを含む幹部たちは脅威を覚えた。

しかしそのケイニーシャも、カルチノイズの慎重かつ狡猾な、そして恐ろしく遠回りな罠にかかり、こうして痴態を晒しているわけであるが。

「てめえ……カルチノイズ……！ この卑怯者めが……！」

自分を罠に嵌めた軍師を見て、怒りを露わにするケイニーシャ。下級モンスターたちに翻られ、精神は疲弊しているはずであるが、あるいはそれよりも回復力の方が高いのだろう。実際、彼女の言う通り、受精率の高い魔族の精子でこれだけ膈内射精されているにも拘わらず、いまだ一度の妊娠すらしていないのは、彼女の神的防御力の高さ故だろう。

「あなたに訊きたいことがあります、ケイニーシャ。強き天使よ」

「誰がっ……！ 手足を潰されようが、何度犯されようが、オレは何も喋らねえ……！
今までも、これからもだ……！」

「やれやれ、魔物どもの精液まみれで吠えるセリフではありませんね」

「ハッ！ てめえらのチンケな種なんざ、オレの胎んなかで全部ぶっ殺してやるぜ……！」

「——おらあっ！」

怒気を孕んだ声を上げ、同時に彼女の周囲に淡い光が放たれた。神術陽煌である。その光波に巻き込まれ、さつきまでケイニーシャを犯していた雑魚モンスターの数匹がゴブウ、キョエエ、と断末魔の叫びを上げながら蒸発した。

『核』である耳を根元まで失っているにも拘わらず、この威力。周囲のモンスターたちは慄き、怯み、後ずさりながらも、怒りに吠える。

「ふふ、元気の良いことだ。まあ、それも当然です」

と、部下たちの怒声を手で制し、カルチノイズは周囲を見渡した。もちろん幹部である彼は魔術で防御し、無傷である。

「あなたの姉妹たちは、ほとんどが『魔族幹部』に犯された後、この遊技場へ捨てられているのです。が、あなたは違う」

「んだと……？」

「我らの間には『天使は、それを捕まえた幹部が好きにして良い』という不文律がありますね。あなたを捕らえたのは私ですが、あなたにはまだ拷問程度のことしか行っていません」

ケイニーシャの瞳が揺れ動く。耳と手足を千切られ、能力をほとんど封じられ、苦痛に満ちた拷問を行っておきながら、その程度、とこの軍師は言ったのだ。

まだ、お前を『穢^{おかし}して』はいない、と言っているのだ。

「私はセックスの前に少し準備をする性質でしてね……。あなたのことを深く知る必要があります。なに、お互いのことを良く知り合うのは、性行為では当然のことでしょう？」

淡々と、カルチノイズは語る。

「この術に必要なのは、時間でした。あなたが十分な『瘴気』を浴び、多量の『魔族の精子』を注がれる時間です。魔のエナジーと言い換えてもいい。とにかく――」

その手が、ケイニーシャの顔の前に伸びて、

「それが今日、満ちました」

魔族の能力が解き放たれた。

「——てめ、あっ……？」

カルチノイズの手のひらから、不気味な黒い波動が放射され、ケイニーシャの頭を包む。

「ああっ……やめっ……やめろっ……それは……これはっ……この方はっ……！」

何が見えているのか、ケイニーシャは定まらぬ視線のまま、これまで一度も見せなかつたような恐怖の表情を浮かばせる。

「やめろっ……やめろ、やめろおっ！ この方を、この方を穢すなっ……！ この方に、オレを……っ！」

そしてカルチノイズが手をどかす。

「ああっ……ああああっ……！」

ケイニーシャは軍師を見て、心の底から震えたような声を出した。しかしその表情には恐怖よりも、畏敬と愛情が上回っている。

「——『お父様』……！」

仮面の下でカルチノイズが薄く微笑んだのを、見た者はいない。

「我が神よっ……！ 我が父、愛するお父様……っ！ そんな、なんで、どうして、違う、違う、こんな、いるはずがないっ……！ ここは……？ どこだ、ここは……？ どうして、お父様がっ……っ！」

狼狽する白兔の天使。

天使。

神の使い。

そう、いまケイニーシャには、カルチノイズが『自身を生み出した神そのもの』に視えているのである。

その者が最も愛する者の幻覚を見せる——それがカルチノイズの最も好むやり方だった。

神に扮したカルチノイズは、厳かに、愛おしそうに、慈しみをもった声で、ケイニーシヤに囁く。

「恐れることはありません、ケイニーシヤ……。あなたの、父なのですよ、私は」

「そんなっ……！ おやめ、おやめくださいっ、オレのようなものに、あなたが声をかけるなどっ……！ いやっ、違うっ、違うっ！ あなたは違う！ あなたは違う！ あなたは違う！ そんなはずはないのに、でも、どうして……どうして……！」

涙が止まらない。

「ああっ、見ないでっ、見ないでくださいっ……！ こんな、敵に敗れたオレの痴態などっ……！ あなたに頂いた能力も、この耳も、汚らわしい魔族どもに奪われた、出来損ないの娘などっ……！ おやめくださいっ、見ないでくださいっ……！」

「良いのです、ケイニーシヤ。あなたはよく頑張りました」

「ああっ……お父様っ、お父様っ……！」

嗚咽が収まらない。

愛する父に、尊敬する神に、正面から声をかけられ、慈しみられた。

優しくされた。

本来、そんなことは有り得ない。天使が自身の神おやと会話するなど有り得ない。姿を見ることすら叶わない。感じられるのは、その威光のみである。

信じられないほどの僥倖。

信じられないほどの幸福。

とてつもないほどの歓喜に満ち溢れるケイニーシヤに、

「では、ケイニーシヤ」

機軍師は、心の底からの想いを込めて、

「これから、あなたを穢おかします」

そう宣った。

そしておもむろに、当然のように、股間からペニスを出した。禍々しく勃起したそれが、ケイニーシャの顔の前に突き出される。

「——へえっ……？」

ケイニーシャの顔が引きつる。オークやゴブリンの精液に汚れた美しい顔が、愛する父に告げられた言葉によって硬直する。

穢軍師は、心の底からの愉おも悦いを込めて、こう続けた。

「私のチンポを舐めなさい」

「——なんっ……で……？」

畏敬と愛情の籠った表情が、失意と絶望に満ちた表情に変化していく。

「お父様っ……！ そんな、そんな汚らわしいことを言わないでっ……言わないでくださいっ……！ オレのお父様は、そんなことっ……！」

「父の言うことが聞けませんか？ 仕方ありませんね……口でできないというのなら」

「ああっ、おやめくださいっ、お父様っ……！」

カルチノイズは下半身を包む衣の形状を変化させ、自身の陰茎を露わにした。そうして、嫌がるケイニーシャに覆いかぶさる。

ケイニーシャの目には、尊敬する父親が、オスの欲望をむき出しにして、自分を犯そうとしているようにしか見えない。

「なんでっ、やめてっ、やめてくださいっ、お父様、お父様あっ！」

泣いて首を振り、いやいやをするケイニーシャ。その様子を周囲の雑魚モンスターどもがニヤニヤと笑いながら眺めているが、ケイニーシャには奴らの姿は目に入らない。

見えるのは、今にも自分を犯そうとしている父親の姿だけ。

「やめてっ、入れないでっ、お父様っ、どうしてえっ!? ——だめえっ!!」

ケイニーシャの必死の懇願を無視し、カルチノイズは自身のペニスをゆっくりと挿入させた。

ずぶぶぶぶっ……!!

「ふう……入りましたよ、ケイニーシャ。あなたの、父の、チンポです。わかりますか?」

「あああああああっあああああああああああああ……!!」

絶望の涙を流し、絶叫するケイニーシャ。

「ふむ、だいぶ緩くなっているようですが……ふんっ」

「んああっ!?♡」

思い切り突かれて、思わず声が出てしまう。それでもケイニーシャは、懇願を続ける。

「やめっ、やめてくださいっ、お父様っ! お父様あっ!♡」

尊敬する父親の顔が目の前にある。崇拜する父親の、性欲に満ちた顔が目の前にある。自分を性的対象にしか見ていない顔。自分を性的に消費することしか考えていない顔。

自分が気持ちよくなるためだけに、娘をレイプする父親の顔だ。

「抜いてっ、抜いてくださいっ、お父様あ! もうおやめくださいっ! お父様はそんなこと、する方ではあっ!♡」

泣きながら、感じながら、必死に訴えるケイニーシャ。

その一方で——。

——やれやれ。

チンポを抽出させながら、カルチノイズは心の中で嘆息した。天界にいる神々など、ケイニーシャが思うほど高潔でもなければ清らかでもない。むしろ魔族や人間以上に好色家が多い。

この天使たちも、用が済めば性的玩具にされていたに違いない。魔族との戦争に用いら
れながら、戦闘に特化した形状ではなく、至高とも言える女体の姿で作られているのがそ
の証左であろう。

ケイニーシャが視ているのは本物の神ではなく、理想の父親像なのだ。

性行為によって勢力を拡大させる人間や魔族と違い、天使は神によって泥から生み出さ
れる。魔族を憎むように設計され、その副作用で『性行為そのもの』を汚らわしく思うよ
うになっている。ゆえに『自分たちを生み出した神が、汚らわしい行為などするはずがな
い』と思い込んでおり、そして神もその誤解を正そうとはしない。

ゆえに。

「いやあっ！ おやめ、おやめくださいっ、お父様あっ……！ いやあ、やめてえ、いや
あっ………！」

大好きだった神から、大嫌いな性行為を強要される。

父親にレイプされる。

その精神的な痛みは、魔族どもに犯された比ではない。

「なんでえっ………どうしてえっ………お父様あっ………お父様あっ………目を覚ましてくださ
いっ………あなたはっ………あなたはっ………そんなことっ………する方ではあっ………！」

ポロポロと大粒の涙を流して、自分をレイプする父親に必死になって声をかけるケイニ
ーシャ。

もう、最強の天使だったかつての面影はない。

ただただ悲しみに暮れて泣く喚くだけの、少女である。

「ケイニーシャ。これはあなたを愛するがゆえなのです。さあ、父の子種をその身に受け
止めなさい。父の子をその胎に宿すのです」

カルチノイズのその言葉に、ケイニーシャの反応が変化した。

「愛っ………？ あいつってえ………お父様あっ………！ あっ！♡ ああっ………！ んああっ………
…！？♡ うそっ………なんでっ………気持ち良くっ………？ んんあっ♡」

「ああっん！♡ きたっ♡ きたっ♡ お父様の精液きたっ♡ 魔物どものチンポなんてっ比べ物にならないくらいっ気持ちいいですっ♡ イくっ♡ お父様に中出しされてイクっ♡ ダメなのにイっちゃううっっ！！♡♡」

びくびくっ、とケイニーシャの太ももまでしかない両足が痙攣する。

「ぐう、絞られます……。これほど犯されておきながら、チンポが抜けないほどの締め付けとは……。配下が病みつきになるわけですね……。！」

ずる……。とカルチノイズのチンポが引き抜かれたマンコからは、魔族の汚い精液が逆流してごぼごぼと噴き出していた。

「うああっ……。♡ ああっ……。♡ お父様に、尊敬するお父様につ……。レイプされちゃったあ……。♡ 犯されちゃったあ……。♡」

潰れたカエルのように——とはいえ四肢は無いのだが——ケイニーシャはだらしなく股を広げると、快感の波が収まらないのか、ぶしーっとな勢いよく潮を吹いた。

「ふう……。良かったですよ、ケイニーシャ。……。ですが」

カルチノイズは自身がたっぷり膣内射精した天使の顔を見下ろしながら、彼女の愛する神を装って告げる。

「——なんと、はしたない。これが我が娘とは、信じられません」

そうして潮を吹き終わったケイニーシャのマンコを——魔物どもに散々弄ばれ肥大したクリトリスを、靴でぐりぐりと踏みつけた。

「はぎゃんっ……。！ そっ、そんなっ、お父様っ、お父様がっ、オレのことを無理やりっ……。！」

「黙りなさい。まさか、この神に責任をなすりつけようとするつもりですか？ 天使の分際で——身の程をわきまえよ！」

「ひっ——！ も、申し訳ありません……。はぎゃんっ！」

慌てて謝ろうとするケイニーシャだが、再びマンコを踏まれて悲鳴を上げると、背中を反らして痙攣した。

「踏まれたくらいで絶頂するとは……おぞましい！ これはお仕置が必要ですが、ケイニーシャ」

「ああっ……お許しをっ……！ お許しくださいっ……！」

「罰として——」

ケイニーシャの謝罪を無視し、カルチノイズはパチンと指を鳴らす。

途端に彼女の視界が晴れる。目の前の存在は変わらず、偉大なる神のままだが、周囲に突如として現れた（ように見える）のは、大量の魔物たち。

穢らわしく、汚らしい、最低最悪のモンスターたち。

全員がオスであり、全員が獣欲に満ちた視線を自分に向けていた。

「ああっ……なんでっ……どうしてっ……!? ここはっ……お父様、ここはっ……天界のはずじゃあっ……！」

狼狽えるケイニーシャへ、穢軍師が淡々と言葉を振り下ろす。

「罰として、ここにいる魔物どもに、輪姦されなさい」

ケイニーシャの表情から色が消えた。

「聞こえませんでしたか？ 返事はどうしました？」

「そんなっ……おやめっ、おやめくださいっ、お許しくださいっ！ お父様にもっ、お父様でも、抵抗があったのにつ、こんな、こんな魔物どもにっ……！」

「返事はどうしたか、と聞いているのです」

「お父様以外は嫌ですっ……！ お願いですお父様っ……お考えをっ、もう一度っ……！ ああっ！」

這い上がることでできないケイニーシャの必死に懇願の最中に、もう我慢できないと言わんばかりに魔物たちが襲い掛かった。

「いやあっ！ やめろっ、やめてえっ！ お父様っ、助けっ、助けてくださいっ！ お父様以外は本当にいやあああっ！」

つい先ほどまでの強気な態度はどこへ行ったのか。

「やめてえっ！ いやあっ！ 触らないでっ、おちんちん入れないでえっ！！」

ケイニーシヤはまるで生娘のように、群がる化物たちへ心の底から悲鳴を上げた。その瞳は完全に怯え切っており、その体から神術の光が発せられることはない。

「やだあっ！ やだあっ！ もうセックスやだあっ！ お父様っ、助けてえ、助けてえ

っ！！ 臆内なに出さないでえっ！ お父様の精子が出ちゃうっ！ 魔物にお腹取られちゃ

うっ！ お父様以外の子供はいやあっ！」

『強気な女が堕ちた』ことで、さらに遊技場での人気を上げたケイニーシヤは、この場にいるほぼ全ての魔物どもの相手をさせられることとなった。

臆や口はもちろん、尻の穴まで使ってもまるで追い付かない。順番を待ちきれない魔物どもは、他の天使を抱えて連れてきてはマンコを使ってオナホ代わりにし、ケイニーシヤが犯される様子をオカズにしてチンポをしごいた。射精する瞬間だけオナホ天使からチンポを抜き、ケイニーシヤの体につっかける徹底ぶりだ。おかげで白兔天使は、魔物の黄ばんだ精液の沼に半ば浸かるようになり、それでも犯され続けた。

カルチノイズはその様子を眺めながら、

——私の眷属が孕むころには、情報も引き出せていることでしょう。

と、満足そうに頷いた。

——ですが、ケイニーシヤが果たしてどの程度の情報を持っているか、疑問が残るところです。もう少し、こちらから仕掛けてみることにしますか。

その手には再びタブレット端末があり、『最後の天使』レイリーブと、オークの姿をした幹部『オークグロマ』が映し出されていた——。

4 オークグロマ出現

それから、一週間後。

都内某所——高級ショッピング街。

日本有数の繁華街であり、国内外の高級店が並ぶ。

片道四車線の大きな中央通りでは、オリンピックやサッカーワールドカップ、ワールドベースボールなどの凱旋パレードも行われこともある。

まさに、東京を代表するショッピング街である。

その中央通りを、異形の怪物たちが行進していた。

パレードである。

すでにこの土地は自分たちのものであると、そう主張するための、侵略パレードであった。

馬車のようなのであるが、牽いているのは人間界に存在する馬ではない。かつて地球に存在していたと言われている恐竜——トリケラトプスに似た魔物であった。荷台は一つで、二匹のトリケラトプスが牽いている。その周囲をオークやゴブリン、ミノタウロスに大鬼と^{オーガ}いった魔物が行進しており、さらに最も外側には黒づくめの戦闘員たちが固めていた。

中央、豪華な装飾が施された荷台の上は玉座が備えられ、一目でそのパレードの主役である^{オーガ}とわかる。それはまるで古代における王の凱旋であり、自らの威光を侵略地に示すためのものであった。

そして玉座に座るのは、イカトバスに代わり日本を侵攻し、そのための『障害』を見事排除せしめた、灰色の肌を持った巨大なオーク——獣鬼帝オークグロマと、

「ああ……天使さまがっ……!」

「レイリーブ……!! 嘘だろっ……!!」

「そんな、酷い……!!」

その『障害』であり、オークグロマに敗北し、無残にも凌辱された、半裸の陽煌天使レイリーブであった。人々は、敗北した守護天使の哀れな姿に、悲嘆と絶望の声を漏らしていた。

二人とも玉座に座っているわけではあるが、仲良く隣り合っているわけではない。

レイリーブは、挿入されている。

オークグロマのチンポを、入れられている。

玉座に座るオークグロマの膝の上に、中学生並みにちんまいレイリーブが、チンポを挿入されたまま座らされているのであった。いわゆる『背面座位』の形であるが、あまりにも体格差があり過ぎて、とてもセックスをしているようには見えない。

オークグロマの巨大な片手でその細い腰を掴まれ、無造作にじゅっぽじゅっぽと上下に動かされ、中学生の子供マンコにオークの巨大チンポをピストンされるレイリーブの姿は、もはやただのオナホであった。

「う、うあっ……!! いやあっ、見ないっ、でえっ、見ないっ、でえっ……!!」

醜い豚の化物に、美少女天使がレイプされている。

なぜロリ爆乳天使は敗北したのか。

話は数時間前に遡る――。

☆

デートを終えた翌日。

比呂の部屋。

奥付

発行：2021/12/20

小説：妹尾 尻尾

イラスト：舷

製作：小柄山脈社

Twitter : @R18_sippo_senoo

レイプは犯罪です。絶対にマネしないでください。
この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件とは一切関係ありません。
本作品は成人向け作品です。18歳未満の方の購入・閲覧を禁止致します。
本作品の全部あるいは一部を転載・配信・送信する行為を禁じます。

